



読書の効用

関川富士子
aiic⁽¹⁾ 会議通訳者

私は幼いときから本を読むのが好きでした。

「富士子は読む本がなくなったら、新聞でも読むのね。」

といわれたのが小学校低学年の頃。でも、その頃から辞書を牽くその一手間を省略していたのが今日の私を作った原因なのでしょう。

小学校の高学年の頃、もらったお小遣いで近所の本屋さんに行って買ったのが『チャタレイ婦人の恋人』。題名に惹かれて買い求め、いそいそと家に帰りました。ところが母にみせたら顔色が変わり

「取り替えていらっしやい。」

未だに意気地なしの私は欠陥商品を買っても、釣り銭を間違えられても、クレームをつけることはありません。小学生の私に「お取り替え」ができるはずがないではありませんか。しかし、そこは内弁慶の娘のことを知り抜いている母、一緒に本屋さんに行ってくれました。お店の伯母さんに説明して、伯母さんも

「へんだと思っていたのよ。」

と応え、私はなにが「へん」なのか分からないまま、同じ全集の『モンテ・クリスト伯』と交換してもらってホクホク。だって、こちらは2巻本(!)。とても、得した気持ちになりました。

『モンテ・クリスト伯』を読み進むうち、何回もでてくるのが「額に」。「がくに」というのはなんのことだろうと思いつつ、2巻目も半ばではっと気付きました。これは、「たしかに」と読むのではなかろうかと。でも、未だに辞書を牽いて確認しておりません。もうひとつ『モンテ・クリスト伯』で確認していないのが「而して」。私なりに「そして」と読んでおりましたが、はて、果たして正しくはなんと読むのでしょうかね。

高校生の英語の授業でもおなじようなことがありました。

「分からない単語を牽きながら本を読むと語彙が増えるよ」

と先生に渡されたのが『Mrs Harris goes to Paris』。読み進むうちに先が気になって、辞書など牽いてられません。前後関係で意味を推察して済ませて一気に読んでしまいました。

でも、これはこれで、会議通訳者となった私にとっても役に立っている能力です。つまり、辞書を牽く時間がない現場——とりわけ同時通訳の場合——では、前後関係で推察するしかないのですから。

読書の効用を説明する文章としては、米原万里さんの基調講演「本は理想的な日本語と外国語の教師」(2003年5月28日) (<https://katsuji.yomiuri.co.jp/archives/57>)がお奨めです。

1. Association Internationale des Interprètes de Conférence: www.aiic.net